

■ふわとろわたしを召し上げれ♪

ゝ家庭部のえっちな体験入部ゝ

☆声優さんへのお願い

〱一人称←私、二人称←きみ

キャラクター

〱明るく優しい声でお願いします

〱当サークルではヒロインとの人間

関係の形成を重視しております。

トラックを重ねることに

親密度を増していき、最終的には  
あまあまなえっちでお願いします。

〱台本は言いやすいように

少しアレンジしていただいて  
かまいません。

位置指定のルール

一度つけた位置は以降の「」で同じです。  
ただし、便宜のため、  
台本ページが変わると  
改めてつけています。

★はSEです。

編集tonericoさん江

台本化した都合上、セリフは3行程度に  
分けています。

ですがキャラが生き生きしている感じを  
出したいので、セリフのまとまりを気に  
せず、テンポよくつなげてあげてくださ  
い。(C P P)

スタッフ	茶渡エイジ
シナリオ	
声	秋野かえで
イラスト	秋民莉緒
ロゴ	ヲリ
音声編集	Tonerico
企画・台本化	中島駿平
台本化・ディレクション	
	CPP
企画修正	御厨みくり

トラック0「家庭部に体験入部いかがですか」

★廊下、近寄る音

／＼背面近くで話します

「あ、あの……すみません」

／＼背面近くから正面近くに回るように話します

「もしかして間違ってたら、ごめんなさい  
なんですけど……。」

「今……そこで『家庭部』の

部員募集のポスターを  
見ていましたよね？」

／＼さらに一歩近づき話します。

「や、やっぱり。見てくれたんですね！  
もしかして……」

『家庭部』に興味がおありなんですか？」

／＼やや早口で

「部室の前で立ち止まっている、  
ということは 少なくとも、  
ほんの一部でも

『家庭部』に興味があるという認識で  
よろしいですか？ よろしいですよね？」

／＼正面近く、一歩離れるように話します  
「あっ……ごめんなさい。

食い気味に話しかけてしまっ……。」

／＼正面近く

「安心してください。

不審者ではありません。

だからその、

スマホで通報するのはやめてください」

★数歩離れる音（後ずさりする感じ）

／＼正面遠くから話します

「ま、待って 逃げないでください。

たしかに私が逆の立場だったら

絶対に怪しいですけど、

ここは大丈夫なので、

逃げないでください」

／＼正面遠くから近くへ移動しながら話します

「えへへ……袖を掴みました。

もう逃げられないですよ。えへへ……」

／＼正面近くで話します

「こほん。失礼。

色々あって舞い上がっているので、

私、少し落ち着きますね。すーはー……」

「あらためまして、私、

繭宮こもりといいます

きみが今見ていた

『家庭部』の関係者です」

／＼正面近く

「でも、そんなに固くならなくて大丈夫ですよ

『家庭部』だけにアットホームな部活を目指していますから」

「まあまあ

ここで会ったのもご縁ですから。お話だけでもしていきませんか？」

「ふむふむ、

部活を探して回ってるんですね？」

「運動部を色々回ってみたけど、

これだっていう部活がなかったから、今は文化部を回ってる……。」

「たしかにうちって、少し前まで

女子校だったから、男子向けの部活で、しかも運動部ってなると

選択肢はかなり少ないですよね……。」

／＼正面間近に移動しながら話します

「そういうことでしたら、

ぜひとも『家庭部』に

入部するのはどうでしょうか！？

私の直感が、きみに合う部活はここだと告げています。」

／＼腕組み、自慢げに

「ふふ、私の占いは三割当たるって部活の中でも評判なんですよ？」

／＼右耳元に移動しながら小声でささやきます

「料理とか好き？」

ファッションに興味はある？

女子部員に囲まれて

あっちこっち振り回される準備はいいですか？」

／＼耳元から少し離れて

「あ、最後のは聞かなかった

ふりしてください」

／＼正面近くへ移動しながら話します

「『家庭部』はお菓子作りと被服制作を

メインの活動にしている部活です。」

／＼正面近く

「日頃の活動はお菓子作りを

中心にしています、

学園祭やイベントに合わせて

被服制作を行うイメージで」

「お菓子作りも、被服制作も、

いきなりハードルが高そうだって

思うかもしれませんが、だいじょーぶ」

「最初は見てるだけでいいんです。

クッキーや白玉あんみつを

食べるだけでも、全然いいですよ」

／＼正面近く

「ね？」

だんだん楽そうな部活だと錯覚……

楽しそうな部活に

思えてきたんじゃないかもしれませんか？」

「活動自体は運動部みたい

にハードじゃないですし、

勉強の邪魔にならない、

きみにぴったりの部活だということは

保証します」

／＼正面間近に移動しながら小声でささや  
きます

「それに……今なら男子はきみ一人。

可愛い女の子に囲まれ放題……なんて」

／＼左耳元へ移動しながら小声で囁きます

「それに私も……」

君が入ってくれたら、嬉しいです。」

「慣れるまで不安？

料理も裁縫もしたことない？

私が、つきっきりできみの

お世話しちゃいますから……♪」

／＼左耳元から正面近くへ移動しながら話  
します

「そ、そうだ！

今日は体験入部なんていかがでしょう！

我ながら、なんてナイスなアイデア！

善は急げです。早く部室に入りましょう」

トラック1「こもりの白玉こねこねクッキン  
グ♪」

／＼右側近くで話します

「それでは、

体験入部をはじめていきましょう！」

「今日は部活がない日なので、

簡単なもので……

フルーツ白玉を作る、

というのはどうでしょう？」

／＼やや早口で

「甘いもの、好きですか？

うんうん。勉強で疲れた頭に、

甘いものはいいですよね！

じゃあ、決まりですね。

体験入部は

フルーツ白玉づくりにけてーい。

（拍手）

「まず、エプロンをつけてください。

部活の備品があるので、

そちらを使ってくださいね。

私も、自前のエプロンが

あるので着替えて、と……」



★エプロン着替える音

「はい、準備完了です。

うんうん、似合ってますよ。

私も、似合いますか？

ありがとうございます。

制服の上からエプロンを着るのって、  
好きなんですよね」

／＼右側近くで話します

「普段着の上から着るよりも、  
制服の方が家庭的な感じが  
すると思いますか？」

「…え…：…ちよつと趣味がマニアック？  
そ、そんなことないですよ」

「エプロンつけられました？

あ…：…もしかして後ろで

ちようちよ結びするの、苦戦してます？」

／＼すこし小声で話します

「意外と不器用…：…可愛い…：…」

／＼右側近くで話します

「あ、いえいえ。恥ずかしがらなくても、

ぜんぜん大丈夫ですよ。

緊張していると普段できることも  
できないときありますし…：…」

／＼右側近くで話します

「そんなときこそ、

私を頼ってくださいね！

家庭部の部長として、責任を持って、  
手伝ってあげますね」

「え、そんなに気合いを入れる

場面じゃない？

いいんです。遠慮しないでください。

では、後ろ、失礼しますね……」

／＼背面近くに移動しながら話します

「これは……失敗して固結びに

なっちゃってますね。

今ほどきますから、

ちよっと待っててくださいね……」

／＼腰回りの紐から解きます

／＼背面で囁きます

「ん……。

固くて、取れない……。

ん…… んん……」

／＼背面で話します

「はあ……

思ったより、固いですね。

もう少し…… んん……

よし ほどけました！」

「はい。腰の後ろは結べましたよ。

あ、まだ動かないでくださいね。

首のうしろにも、

結ぶところがありますから」

〃首側の紐を解きます

〃背面近くで話します

「ん……。」

ん………」

「首すじ、くすぐったいですか？

でも、あとちよつとだけ

我慢してくださいね

ん………」

「あ、髪に糸くずがついてますね。

取ってあげますね」

〃左耳に息を吹きかけます

「ふ……」

ふ………」

〃ここから男性(KU100)の右側に立つ

〃指定により男性の方を向きながら演技  
してください

〃右側近くに移動しながらやや早口で話  
します

〃男性の方を向きながら

「わざと耳に息をかけて、

いたずらしてないかって？

す、するわけないじゃないですか。

私は部長ですよ？

大事な体験入部生のきみに、

そんなことすると思いますか？

ふーってすると、ビクッとなるのが

面白くなって思ってるだけです」

／＼男性の方を向きながら

「さて、白玉づくりの用意ができました。

お湯を沸かしながら、

白玉粉を練っていきましょう」

「甘いのが好きなら、白玉を練るときに

お砂糖をプラスで入れてもいいですけど、

今回はどうしますか？」

／＼頷く男性

「では、そのようにしましょう。

ほんのり甘い白玉、しあわせの味です」

★小鍋でお湯を沸かす音

「最初に、こちらのお鍋で

お湯を沸かしておきます」

「本当は顧問の先生がいないと

火は使えないんですが、

今日は特別ですよ」

／＼やや小声で、手を添えて

「誰にも言っちゃいけませんからね。

二人だけの秘密、ですからね……？」

★途中耳たぶの音(?)

／＼正面を向く・目線下

「ボウルに白玉粉を移して、  
水を加えてこね合わせましょう」

／＼男性を見る

「じゃあ……（男性を見る）  
混ぜてもらってもいいですか？」

／＼正面を向く・目線下

「最初は粉が飛ばないように慎重に……。  
うんうん、いい感じです♪」

「混ぜてきたら、耳たぶくらいの  
柔らかさにこねてくださいね」

／＼男性を見る

「え、手が離せないから、  
耳たぶの硬さが分からない？

ええと……  
このくらいですよ」

／＼男性の耳たぶを揉む

「ほらほら。

分かります？

あ……私がきみの耳たぶを  
揉んでたらいけませんね！  
なんでやねーん……」

／＼男性を見る

「あ、あれ。面白くありませんでした？  
女子部員の間だと、  
けっこう笑いが起きるんですが……」

「わっ、耳が真っ赤になってますよ。  
大丈夫ですか？  
強くつまんでしまいましたか？」

「ごめんなさい……。  
その……きみが接しやすいから、  
調子に乗ってしまいました……」

「え……結局、  
耳たぶの硬さが分からないまま？  
それじゃ……  
わ……私の耳でよければ、  
触ってみます？」

「い、いいですよ。  
ど、どうぞお好きに……」

「な、なんちゃって……。  
あっ、  
お、お湯が湧きましたね」

「では、  
白玉を丸めてお鍋に入れていきましょう。  
投入する時はお湯跳ねに  
気をつけてくださいね。」

／＼正面を向く・目線下

いゝASMRポイント

「こねこね……」

こねこね……」

「あ……急に静かになっちゃいましたね。

(男性を見る)

こねてる時って、集中しちやいますよね」

／＼男性を見る

「そういえば、体験入部の話ですけど、

他に気になった部活は

あったんですか……？」

／＼正面を向く・目線下

「ふむふむ……。

最初に運動部を回ってみて、

今は文化部を回ってるんですね。

たしかに七森学園って、

少し前まで女子校でしたからね」

「男子の部活の選択肢は

かなり少ないと思います。

せっかく共学になったのに、

そういうところは

ちよっとかわいそうですね」

／＼男性を見る

「え？ そんなに残念じゃないですか？

そうなんですネ。

きみがこの学園に入ったのは、

将来やりたいことを

勉強できるからなんですネ」

／＼男性を見る

「す……すごいです！」

そんな風に言えるの、  
尊敬しちゃうな……」

／＼正面を向く・目線下

「私、自分のやりたいことに  
まっすぐな人を応援するの、  
好きなんです。

だから家庭部の部長も  
やってるんですけど……」

／＼男性を見る

「あ……ということは、

特に入りたい部活も  
ないということですね？  
ですよ？」

「……ふむふむ。

何でもいいわけじゃなくて、  
入るからにはきちんと選びたい……と」

「ふふ……。

あ、急に笑ってごめんなさい。  
きみって、もしかしなくても、  
とっても真面目って言われませんか？」

「まっすぐ真面目なのって、

恥ずかしくなんてないですよ。  
それって、すごく素敵だと思うし……。  
……あ、あはは。

いきなり何を言ってるんですかね、私」



／＼正面を向く・目線下

「あ、（向く）

白玉が浮かんできましたね。

おたまですくって、

冷水に取ってください。

白玉の残りがなくなるまで

繰り返していきます」

★お玉ですくう水音

／＼男性を見る

「並行して、フルーツを準備します。

今回は、缶詰のフルーツを使いますので、  
フタを開けるだけです」

「では、この重要な役目をお願いするのは…」

／＼ポ○モンのサ○シ風で

「（溜めてから）

…きみに決めた！」

／＼お湯が沸く音が静かに聞こえる沈黙

「う……。

か、缶切りです、どうぞ。

今のは、気にしないでくれて  
いいですので……」

「え……

缶切り使うの、初めてなんですか？

まあ、おめでとうございます。

体験入部っぽくなってきましたね。

初めてのことに

どんどん挑戦していきましょう！」

／＼男性を見ながら

「では……。

最初だけ私がやるので、

あとは真似してみてください」

「開ける時は、中身のシロップを

こぼさないようにしてくださいね

白玉に入れるシロップとして使います」

「あと、缶詰のふちで指を切らないように  
気をつけてくださいね」

★缶を切る音

／＼正面を向く・目線下

「そうそう、いいですよ。

やっぱり男の子は力がありますね  
はやーい、もう全部切れそうです」

「あっ、さいこの一部は切らずに  
残しておいて……って、

ああっ(慌てる)」

／＼缶のフタで指を切ってしまう男性

／＼男性の方を向く

「だ……大丈夫ですか？」

大変、指から血が……」

／＼「大丈夫」と話す男性

「いえ、それは大したことなくないです  
唾つけておいても治りませんよ。  
そんなの信じちゃダメです」

### ★水の音

／＼正面をむく・目線下

「まずは傷口を流水で洗い流して……  
絆創膏を貼りますね」

／＼生徒手帳から絆創膏を取り出す

／＼男性の方を向く

「これですか？」

家庭部の部長として

いつも手帳に入れてるんです」

「意外と役に立つんですね。

こういうときがあるので」

「ただ……可愛い花柄なので、

男の子がつけるのはちよつと

恥ずかしいかもしれませんが」

／＼絆創膏をまく

「はい、巻きましたよ。

家に帰るまではつけててくださいね。  
それと……」

／＼頭を下げる

「私が無茶言って、缶切りを使わせて  
しまったせいで怪我させちゃって、  
ごめんなさい。

／＼頭を上げる

「もう一度、怪我した指、  
貸してもらっていいですか」

／＼指先にキスします

「ちゅっ……。

こ、これは、早く治る、おまじないです。  
唾をつけて治すより、  
良いかなと思って……。

あ、ああ、

今度はお鍋が吹きこぼれそう！」

「あつい！」

／＼一旦フェードアウト

★水の音

／＼正面を向く・目線下

「すみません……」

私としたことが、

部長なのに不注意で

やけどしてしまいました」

／＼男性の方を向く

「いえいえ、きみは何も悪くないです。

え、今度は自分が何かできないかって？」

「そうですね……（やや上を見る）」

／＼男性の方を向く

「じゃあ、さっきみたいに唾をつけて

治してもらおうかなあ……。

なーんて……冗談です」

「代わりと言ってはなんですが……

やけどしたとき、

耳を触るじゃないですか。

あれ、耳たぶが冷たいから

効果があるみたいなんですけど」

「いま私の耳、

熱くなっちゃまっているので、

きみの耳をお借りしてもいいですか？」

「もちろん、本気で言ってますよ？

……いいですか？

では、お言葉に甘えて。

★左耳みみたぶの音

「ふふ……。

この触り心地、癖になりそうです」

「やけどの痛み、和らいできました。

ありがとうございます」

★盛り付ける音

／＼正面を向く・目線下

「では、最後の仕上げです。

お皿に、白玉とフルーツを

盛り付けていきましょう」

「これで……

じゃーん。フルーツ白玉、完成です。

途中で色々ハプニングもありましたけど、

（男性の方を向く）

無事に完成してよかったです！

お疲れさまでした」

「では……」

お待ちかねの実食タイムに移りますね。  
せつかくですから、

眺めのいい窓側の席に行きましょう。

ほらほら、きみも器を持つて。

それでは移動します」

／＼フェードアウト

トラック2「家庭部部长の秘密の被服」

／＼正面近くで話します

「それでは試食会をはじめますね。  
いただきます」

★スプーンや食器の音

「んゝ。美味しいゝ。

自分で作るスイーツって

手間暇をかけた分、

普通に食べるより美味しいですねゝ」

「あっ……。

その指の怪我……

ちよつと食べにくそうですよね？

……どうして身構えたんです？」

「安心してください。

変なことは企んでないので！

ただ、私があーんってして

食べさせてあげたいだけです」

「あっ、逃げないでくださいよ。

逃げたら追いかけてちやいますよ？

余計にくつついちゃいますからねゝ。

……なんちゃって

（男性の左側に移動しながら）

では、失礼して隣に移動しますね」



★男子の隣に移動する音

／＼左側近くで話します

「白玉をすくって、

お口まで運びますので、

あーん、ってしてくださいね」

★白玉を掬う音

「それじゃあ。

スプーンで白玉をすくって……。

はーい、あーん……」

★白玉を掬う音

「美味しいですか？

ではもうひとつ。

はーい、あーん……」

「ふふ。え？

自分だけ食べさせてもらうのは不公平？

そうですね。

怪我をしてるのはきみですし」

「え、私のやけども

痛そうじゃないかって……。

いえいえ私は平気です。

もてなす側の私が

食べさせてもらうなんて、

きみに悪いですし……」

「それに、その、後輩の男の子に、

そ、そんなことしてもらうなんて、

さすがに恥ずかしく

なってしまう……」

／＼左側近くで話します

「もちろん、きみに食べさせて

もらうのが嫌というわけではなくて、  
む、むしろ嬉しい、ですけど……」

「あつ、じゃあ、こうしましょう。

お互いに食べさせ合いっこするんです。  
どうでしょう？

それならいいですよね」

★白玉を掬う音

「そ、それじゃあ……

あの、順番的に私ということで、  
お言葉に甘えて……。

あゝん……」

★白玉を掬う音

「もぐもぐ……。

ふふ……。

ちよつと緊張して、  
味が分からなくなってるかも……」

「でも美味しいです。

では、お返しにもう一度……。

はい、あゝん」

★スプーンを置く音

「ふふ……。

同じ指を怪我して、  
お互い食べさせあっているって、  
変な感じですけど、私たち、  
お揃いですね」

「さて。

料理の体験は今やったので、  
せっかくですし、  
服飾の方も説明だけでも  
していきましょうか」

「では試食会はちよつと中断しまして。  
部屋の向こう側が被服制作の  
スペースになっていますので、  
見に行きましょう」

／＼フェードアウト

／＼フェードイン

★歩く音（数歩）

／＼正面近くで話します  
「こちらがスペースです。

ちようどコンテストが終わったばかりで、  
散らかっていてすみません。  
本当ならもっと整理整頓  
されているはずなんですけど……」

「私が作っている服ですか？  
もちろん、ありますよ。  
少し待っていてくださいね。  
たしか……このあたりに……」

「あ、ありました。

この赤いドレスです。

胸につけたハートのクッションが  
ポイントなんですよ。

え、売り物みたい、ですか？

ふふ……ありがとうございます」

／＼とぼけながら

「え……メイド服？

な、何の話ですか？

メイド服らしきものが

ケースからはみ出している……？」

「や、やですね。

学校の部室に、

メイド服なんて置いてあるわけが……」

★服をしまいこむ音

「ふう……。

今のは、見なかったことにして  
くださいね。

いいですね」

「え……？

メイド服をしまうときに

男性用のコスプレ衣装も見えた？」

／＼やや早口で

「なっ、なananのことでしょか？」

今度こそ本当に知りませんよ？

女子だけの部活に、

メイド服ならまだしも、

アニメ『異世界最強俺様騎士団物語』の

主人公ハルト様の衣装とか、

そんなもの……」

／＼やや沈黙あつて

「……見ました？」

……見ちゃったんですね？」

「今のも見なかったことに……」

えっ、ハルト様のこと、

知ってるんですか？

原作小説を読んだって、

ほ、ほんとですか！？」

きやう、すごい！

こんなところで同志に会えるなんて！」

「そ、それで……」

この衣装のことなのですが……

もう言っちゃいますけど、

私、主人公のハルト様が大好きなんです。

「そのファン活動といいますか、

私の場合は、

コスプレの衣装を作ること、

ハルト様への想いを表現しているんです」

「でも、……がんばって作ったところで、  
着てくれる人はいないんですけどね。  
えへへ……」

「こんな趣味があるなんて、  
いくらきみでも引いちゃいますよね」

「え、本当ですか？

受け入れてくれるんですか？

じゃ、じゃあ……その……

もし、よかったら、

……この衣装なんですけど……

き、着てみてくれませんか！？」

「そうです、試着です。

私の見立てが間違っていないければ、

きみの身長とハルト様の身長の設定は

同じなんですよ。

だから絶対似合うと思います！

着替えて、その姿を

私に見せてくれませんか！」

★主人公着替え始める音

「きや、きやあっ！

（後ろを向く）

だからって、

急に着替え始めないでください！

私、後ろ向いていますから！」

★男子着替える布ずれの音

／＼後ろを向きながら話します

「あの……

衣装の着方で

分からないところはありますか？

もし分からない部分などありましたら

おっしゃってくださいね

あとウィッグもあるので

つけてみてください」

「そろそろ振り向いても

大丈夫でしょうか？

で、では、振り向きますね？

いきますね？

はあ……。

ついに、ハルト様とのご対面……。

どきどきしますね……

そーっ……

（ゆっくりと正面を向きながら）「

／＼正面近く・嬉しそうに跳ねる感じで  
「す……すごい！

すごいです！

ハルト様そっくりじゃないですかー！  
きゃー！ なにこれ、かつこいい！  
しゃ、写真撮っていいですか？」

★スマホのカメラで撮る音

「ありがとうございます！」

★スマホのカメラで撮る音

「ポ、ポーズください！」

★スマホのカメラで撮る音

「目線ください！」

★スマホのカメラで撮る音



//ここから少し、もじもじしながら

「あ、あの……！」

最後にこれだけ、  
お願いしてもいいですか？」

「その状態で、私のこと……

だ、抱きしめて  
いただけないでしょうか？」

「アニメ1期の最終話で

ヒロインと抱きしめあう

シーンがありますよね？

あのシーンみたいに

抱きしめてほしいんです」

／／懇願

「二度でいいからハルト様の

包容力を味わってみたいんです！

ほんの少し気分を味わうだけで

いいので！」

「良いんですか？

やったぁ……！

じゃあ、私も準備をしますので、

向こうを向いててもらっていいですか？」

／＼頭にはてなマークの男性

「え、着替えるんですよ」

「だってきみはハルト様の衣装で、

それなのに私が学校の制服だったら、

あの感動のシーンが

再現できないじゃないですか

だからさっきのメイド服に着替えます」

「あ、教室から出ていなくても

大丈夫ですよ。

後ろを向いてもらえれば結構です。

でも振り向いたらだめですよ」

★後方から聞こえる着替える布ずれの音

●着替える際の吐息

／＼男性に背を向けた状態で

「はい、こっち向いて大丈夫ですよ。

あの……首の後ろのホック、

とめていただけないでしょうか。

一人だと手が届かなくて……」

／＼男性に背を向け

「ひゃ……うふふ、くすぐりたい。

ん……。ふう……。

ありがとうございます。」

／＼正面を向きながら

「どうでしょう。

ヒロインのミミカちゃんの

メイド服ですよ。

似合ってますか？

うふふ、似合ってるって

言ってもらえて嬉しいです……」

／＼少し恥ずかしそうに

「で、では、腕を左右に開いてください。

私がきみの胸に飛び込みます。

いきますよ……」

／＼抱き着く

「それ！」

右耳元で囁く

「ぎゅー。

ああ、ハルト様……」

「ぎゅー。

あったかい……。

そして私はハルト様の胸に抱かれて

死ぬ……」

／＼抱き着きから離れて正面近く

「ふう……生き返りました。

ごめんなさい。

本当にごめんなさい。

わたしテンション上がっちゃって……。

ご迷惑をおかけしちゃいました」

／＼正面近くで話します

「ふう……正気に戻ったのに、  
身体がとつても熱い……。  
ずっとドキドキしてて……」

「なにせ男性に抱きしめられるなんて、  
初めての経験ですから……。

これじゃまるで私が  
体験入部してるみたいですね。ふふ……」

「ええと……

さっき一緒に料理を作ったときも  
そうでしたけど、

私のことこんなに気遣ってくれて……  
私の願望を叶えるために  
コスプレしてくれたり……」

「その、変なこと言ったらごめんなさい。  
私、部活関係なく、  
きみと一緒にいたらなあ、  
って思っちゃってます……」

「いきなり変ですよね。  
でも、その……

／＼少し俯き小声で

「もしかしたら、きみのこと、好き、  
になっちゃったかもしれないです。  
なんて……」

／＼正面を向いてやや慌てながら

「あ、今のは、

聞き流してもらっていいですからね。

ま、まだ試食も残ってますし、

一度席に戻りましょうか。

ほらほら、行きますよ。

聞きたい事があるなら、

向こうで聞きますからね」

／＼フェードアウト

トラック3「女の子は衣装で気持ちも変わるんです」

／＼右側近くで話します

「ええと……」

コスプレしたままだと座れないですよね。

コートは脱いじゃってください。

剣も外して大丈夫ですよ。

こちらでお預かりしますね」

／＼正面近くに移動しながら話します

「それで、提案なんですけど……」。

もしきみさえよければ、

この衣装のままで、

さっきみたいなこと、してみませんか？」

「何をするのかって？

その……食べさせ合い、を……

したいな、と」

「あ、ごめんなさい。

やっぱり、

ちよつとわがままですよね……」

「ハルト様の衣装を

着てもらえただけでも充分なのに、

これ以上無理にお願いをするのは

よくないなって、

分かってはいるのですが……」

「その……もつときみの

ハルト様を見ていたくて……」

「えっ……？」

い、いいんですか？

私のわがままに、

付き合ってくれるんですか？」

「わ、やったあ。

ありがとうございます！

すっごく、すっごく嬉しいです！」

／＼椅子から立ち上がる

「あ……ちよつと待っててくださいね。

部室のドアに鍵をかけてきます。

べ、別に変なことを

するわけじゃ、ないですよ？

急に誰かが入って

こないようにするだけです」

「さすがに学校でコスプレを見られるのは、

恥ずかしいじゃないですか……。

それに、かつこいいきみの姿を、

自分以外の誰にもに見せたくないなって

……。

あ、いえ、何でもないです。

では行ってきますね」

（正面遠くへ移動しながら）

★小走りする音（行き）

★鍵をかける音

★小走りする音（戻り）

／＼正面近くに移動しながら

「お待たせしました。

試食会の続き、はじめていきますね。  
残っている白玉も、あと少しですね」

★スプーンで掬う音

「それでは……。

白玉をスプーンですくって……。

はい。あーん……。」「

「あ、ごめんなさい。

少しこぼれちゃいましたね。  
ティッシュでふいてあげますね。  
ふきふき……。  
はい。きれいになりました」

★スプーンで掬う音

「では、交代して……お願いします。  
はあ……ハルト様から  
食べさせてもらえるなんて、  
夢のようですう……。ふふ。」

「あー……。ん……。

んっ！（わざと）  
いけない。

私のほっぺにも、  
フルーツ白玉のお汁が  
ついちゃいました……。」「

「え、ふいてくれるんですか？  
ありがとうございます  
ん……。」「



「あの……？」

私の思い過ごしかもしれないですけど、さつきから、

ずーっと目をそらしていますよね？

全然こつちを見てくれないですよ？

現に今も、私の方、

見てくれてないですし……」

「あっ……。」

もしかして、

もう帰らなきゃいけない時間ですか？

そうだったらごめんなさい。

きみの予定も確認しないまま

付き合わせてしまいました……」

「え……。」

そうじゃないんですか？

単純に……目のやり場に困ってる？

私の服が原因で……？」

「あ、あ……たしかに。

いま私、ミミカのメイド服を着てますね。

作ったのが自分なので、

全然気にしていませんでした」

「制服や普段着よりも、少し……

いえ、かなり丈が短いかも……。

胸の谷間とか、お尻とか……。

少し動くだけで

ばっちり見えちゃいそう……」

「あわわ、だから、あんまり見ないように  
してくれていたんですね……」

「きみはいい人ですね……。」

で、でも、大丈夫です！

この衣装のことなら、

気にしないでください！

見られる覚悟がなければ

メイド服なんて着ていません」

「それに私だって、

ハルト様の衣装を……

それを着たきみのことを、

穴が開くほど見させていただきました」

「それどころか写真まで

撮ってるんですから……。」

むしろ私のことも

穴があくほど見てもらわないと、

つり合いがとれません」

「……。」

「は、はう……。」

だ、だからといって、

そんなにじっくり見られると、

さすがに恥ずかしかったり……。」

「うう、そんなのダメですよね。、

ちゃんと見てほしいから、がんばります」

「こっちを向いてください、ハルト様……  
じー……」

「は、はうっ。

見られるだけのはずが、  
思わず見つめ合ってしまった。  
か、顔が熱い……」

「でもミミカはハルト様のことが  
大好きなので、  
見つめ合ってドキドキするのは  
当たり前のことですよね……」

★抱きつく際に布音

／立ち上がる

「そ、そうだ。

も、もういちど、  
ぎゅーって抱きしめてもらえませんか？」

「外から押さえてほしいんです……  
じゃないとバラバラに  
なってしまうそうで……」

／＼男性が立ち上がり接近してくる

「お、お願いします……」

ぎゅーっとしてください。

(抱き着く、右耳元に移動)

ぎゅー……」

／＼右耳元でささやきます

「ん……。 (甘い吐息)

んん……。 (甘い吐息)」

「……。

はふう……。 (離れる)」

／＼正面近くで話します

「あ、ありがとうございます……。

おかげで、収まったみたいです。

ああ、でも……

ふ、普通にドキドキしてきて

しまいました……」

「あの……。

お、お願いが、もう一つだけあるんです。

これは、その、

いきなりすぎるかもしれませんが……」

「…キス…してもいいですか？」

／＼正面近く・目線下もじもしながら  
「や……やっぱり変ですよね。」

あはは……。  
さつき会ったばかりなのに……  
いきなりキスなんて」

／＼正面近く・男性の方を向いて  
「で、でも今、したいなって思ってたんです。  
だって、こんなにドキドキしたのは、  
きみが初めてなんです  
それに……」

「それに、こうして抱きしめられていると  
伝わってくるから……  
きみも今、すつごく、  
ドキドキしてくれてますよね？」

★胸の位置に耳を当てる際の布音

／＼正面間近、男性の胸に耳を当てるよう  
にして顔を横に向け、小声で話す  
「きみの胸に耳を当てていると、心臓の音、  
どんどん早くなってるの聞こえます。

だから……その……  
きみも私と同じ気持ちだったら、  
いいなって……思ってる……」

／＼頷く男性

／＼正面間近、やや男性を見上げながら小声で話します

「ほ、本当ですか？

いいんですか？

わぁ……どうしよう……。

す、すごく、嬉しいです……。

きみも私と、同じこと、

思ってくれているなんて」

「あの……それでキスって、

どうすればいいでしょう？

ご、ごめんなさい。

実は一度も、

そういうことしたことがなくて……。

え、きみもなんですか？」

「ふふ……じゃあ、キスも、

初めて同士なんですね。

嬉しいなあ……。 」

「それじゃあ……。

わ、私からしても、いいですか？

だってほら、

言い出したのは私ですから……。 」

「それに私は先輩でもありますし、

やっぱり私からしたほうがいいかなと。

は、はじめてなので、

変なふうになっちゃったらごめんなさい」

「では……。

します、ね……

また心臓がドキドキしてきたので、  
ぎゅーって抱きしめて  
もらっていいですか？」

／＼抱き着きながらキス

「ん……

ちゅ……。

……ん……」

／＼正面間近・少し離れて小声で

「はぁ……。

……し……しちやいました……。

は、恥ずかしくて、

きみの顔が見れません……」

「緊張とドキドキで、

ぼわぼわしてます……。

でも心が満たされるような、

幸せな気持ち……。

これがキスなんですね……」

「でも、ミミカのコスプレをして、

ハルト様とキスしたから……

じゃないですよ？

今キスをしてみて、はつきりしました」

「きみだから、こんな気持ちになるんです。

私……きみのことが、

大好きになっちゃったみたいです。

わ……私の告白、受けてくれますか？」

／＼頷く男性

「……よかった……」

それじゃあ、今から私たち、  
恋人同士なんですね」

／＼「好きだよ」と伝える男性

「……好き、だよ……？」

うっ……きゅ、急に恋人っぽくするのは  
恥ずかしいですね。

きみも顔が真っ赤ですし……。

話し方は、しばらくこのままで  
いかせてもらいますね……」

「で、でも恋人っぽいことは、  
今すぐでもたくさんしたい、です……」

「たとえば、さっきの食べさせ合いを、  
恋人っぽくするのはどうでしょう。

これもミミカとハルト様の

まねことになるんですけど……。

まず私が白玉を食べて……。

あむ……」

／＼口に咥えている感じで。そんなにも「  
もごさせないで

「お口、開けてください

ん……

ちゅ……」



「こ、こんな感じで、

口移しで食べさせてあげるなんて  
どうでしょう？

こ……恋人じゃないと、  
できないことですよね？

「もちろん、

これで終わりじゃないですよ？  
私のお口の中、見てください……」

「あ……

見えますか……

今ならシロップが絡んでいて、  
私のお口、とくつても甘いと思うんです」

「さっきは恋人になる前の

キスでしたけど……  
恋人としてする初めてのキスを……  
もっと深く、

味わってみるのはいかがですか？」

／＼キス

「ん……。

ちゅ……。

もつと、してください……。

ちゅば……ん……ちゅ……」

／＼ここから積極的にキス

「ちゅば……れろれろ……  
れるる……ちゅば……

ん……(離れる)「

「このキス……幸せな気持ちだが、  
ダイレクトに伝わってきます……。  
最初のキスも優しくて好きだけど、  
こっちのキスはもっと好きかも……」

／次のキスは下を絡める感じで

「もう一度、してもいいですか……？  
ん……。

ちゅうう……

れろ、れろれろ……れろれろ……。  
れろんれろれろれろ……はあむ……  
ちゆるる……」

「れえろ、れるれる……れろれろれろ……。  
はあ…(離れる)」

「甘くて……とろとろ……  
頭の中がふわっとして、  
気持ちいいです……」

「きみも気持ちよさそうな顔、  
しちゃってますね……  
恋人にしかできないキス……  
癖になりそうです……」

「これで終わりなんて、さみしいです…  
もっと、いっっぱい、キスしてください」

# ●キス音（フェードアウト）

トラック4「ふわふわもっちり　これこそ家庭部女子の包容力！」

●キス音、前のトラックに続いている感じで

／／正面間近で小声で話します

「あ……あの……？」

ちよつと、待つてもらっていいですか。

その……とっても言いにくいのですが…」

「きみの……、

その……お、男の子の、

部分がですね……。

お、おつきくなつて、いますよね……？」

／／ここ？と男性

「そ、それです。

ズボンの中で膨らんでいる……

私の太ももに当たっている、

そのことです……」

「すごく固くなつて、

張りつめていますよね……。

制服のズボン越しでも分かるくらい、

ぱんぱんで、

かちかち、です……」

★離れる際の布音

／＼正面間近、やや離れて

「あつ、そんな、慌てて離れなくても、大丈夫ですよ？」

「男の子がいろんな理由で

そうなってしまうのは、

詳しくは分からないですけど、

知ってはいますので……！」

「それって……その、苦しいもの、  
なんですか？」

／＼正面間近で小声で話します

「と、突然、変なこと聞いてすみません。

そこがこうなっている時の男の子って、  
やっぱり窮屈なのかなって」

「もし、そうなら……そのお……

私が慰めてあげなくちゃって、  
思っただけです

だって、か、彼女に、

なったんですし……」

／＼恥ずかしそうに話して

／＼正面間近で小声で

「い、意外そうにしないでください。

わ、私だって、人並みには、

そういうことに興味がありますから！」

「経験はありませんが、知識として……

恋愛の本は読んだりして……

そうになっている時は、

女の子がなぐさめて楽にして

あげるといって、

本に書いてあったので……

今がその時なのかな、と」

「え？ ……読む本が偏っている？

そ、そうなんですか？」

「ん……？」

なぐさめるって、

具体的にどうするのか、ですか？

そ、その……ええと……」

／＼困ったように

「え、えっちなことを、する……とか。

えっ、もつと具体的に、ですか？

え、ええ……」

／＼恥ずかしそうに小声で話します

「その……、

お、お、おっぱいで、挟んであげる……

みたいな？」

／＼正面間近で小声で話します

「ふえ？ も、もっとおっきな声で、

聞こえるように言って欲しい、ですか？

うう……」

「きみって、

意外といじわるだったんですね……。

先輩をあまり困らせるものでは

ありませんよ？

きみは私の彼氏さんですが、

さっきまでは後輩だったんですからね。

もう……」

「それで……きみとしては……

私にそういうこと、してほしいって、

思いますか？

「そ……そうなんです……。

してほしいんですね」

「もう、仕方ありませんね。

いいですよ、私に全部任せてください♪

経験はないですが、

家庭部の先輩としても、

きみの彼女としても、

気持ちよくできるよう、がんばりますね」

★「んしょっ……と」のあとにズボン降ろす

／＼フェラの位置に移動しながら

「それでは……、

ズボンを下ろしちゃいますねー。

んしょ……つと」

「はわ……。

で、出てきました。

すごおい……」

「これが……きみの……、

お、おちんぽさん……なんですね……。

ごくり。

あ、あの、初めて見るので、

観察、してもいいですか？」

「うわぁ……。

こんな形なんですネ。

棒の部分が勢いよく立ち上がって……

さきっぽが真っ赤に腫れて……

今にも破裂しそうなくらい膨らんでいます」

「少し待っていてくださいね、

すぐになぐさめてあげますから」

★「準備しますね」のあとから脱ぎ始める

／フェラの位置で話します

「私も服を脱いで、準備しますね。

メイド服の胸の前を下げて……。

ブラを外して……」

「ふう……。

が、学校で、胸を露出するなんて……

絶対にいけないことなのに、

すごく、ドキドキして、興奮しますね」

「私の、おっぱい……

ちゃんと見えますか？」

「その……どうでしょう？

大きさと柔らかさには、

それなりに自信がある、

つもりなのですが……

気に入ってもらえましたか？」

「形も大きさも申し分ない？

そう言っていたけると、

嬉しいです……♪」

「それでは……きみのここを……

おっぱいで挟んで、楽にしてあげますね」

「わたしのおっぱいで……

きみのおちんぼさんを……えいつ。

えへへ……挟んじやいました♪」



／＼フェラの位置で話します

「ねえ、見てください。」

きみのおちんぼさん、私のおっぱいで、  
埋もれちゃいましたよ」

「最初は挟む力をほとんど入れずに、  
やわらかあく、

おちんぼさんを包み込んで……  
先輩のあまあまでふわふわの  
包容力を味わってくださいね」

「おちんぼさんを、

おっぱいで包み込んで……  
ふわふわ、ふわふわ……」

「左右から少しだけ押さえて……  
ふにふに……ふにふに……。

あっ……びくって、  
おっぱいの中で動きましたよ」

「わあ、すごいです。

おちんぼさんが、  
おつきくなったおかげで、  
おっぱいの間から、  
真っ赤な亀さんが顔を出して  
くれましたよ」

「えへへ……ぴよこんって頭を出して、  
かわいいです……」

／＼フェラの位置で話します

「おっばいで、

おちんぼさんのさきつぽが  
出たり入ったりするように、  
上下に動かしますね」

「左右から押さえて……。

ん、しょ……っ、

ん、しょ……っ ♪

ん、しょ……っ、

ん、しょ……っ ♪

はぁ……っ ♪

「ふふ、かなり固くなってきたので、

少しだけ挟む力、強くしちゃいますね？」

「おっばいの両側から、

ぎゅっと挟んで……

このまま上下に…… ♪

ん、しょ……っ、

ん、しょ……っ ♪

ん、しょ……

っ、ん、しょ……っ ♪

「おっばいの具合はいかがですか？

え？ おっばいがふわふわすぎて、

包まれているだけで全部が気持ちいい？」

「それなら私の大きなおっばいで、

おちんぼさんを

ぜーんぶ包み込んであげますね」

／＼フェラの位置で話します

「ふわふわのおっぱいで、

ぎゅううう……っ。

優しく、あまあく、ぎゅうううう……っ。

このまま上下に動かして、

ん、しょ……ん、しょ……♪

ん、しょ……ん、しょ……♪

あ……っ

「ふにふに甘々な刺激で、おちんぼさんから、  
透明なお汁が出てきましたよ？」

「これって、気持ちよくなると

出てくるんですよ。

これが出るということは、

もうすぐ、アレ、出そうですか？」

「出そう、なんですね。

でも、まだですよ」

「少しでも辛抱して、

気持ちよさを溜めていってください」

「私のもっちりおっぱいで、

たつくさんなでなでするので、

さつきよりも気持ちよく

なってくださいね♪」

／＼ふえれあの位置で話します

「それでは、いきますよ。」

んっしょ、んっしょ……

おちんぼさん、がんばれ、がんばれ♪」

「よいしょ、よいしょ……

おちんぼさん、がまん、がまん♪

んしょ、んしょ、

がんばれ、がんばれ……おちんぼさん♪」

「うふふ……♪

我慢してくれてるおかげで、

透明なお汁が、

さっきからとぷとぷうって、

止まりませんね？

おもしろしているみたいで、

すごくいやらしいです」

「うーん……

さすがに少しかわいそうなので、

さきつぽ、舐めとってあげましょうね。

見ていてくださいね？」

「えっちな先輩の小さな舌先が……、

きみのぱくぱく開いているおちんぼの

さきつぽに……、

ちゅっ。

ふふ、くっついちゃいました。

舌の先端で、っんっん、っんっん」

／＼フェラの位置で話します

「んふう……。」

少ししよっぱくて、

苦みもありますね……

でも……頭がぼわつとしちやう味です」

「恥ずかしいけど、実は……

私のえつちな気持ちも

どんどん高まってきてますよ？」

「おっぱいで挟みながら、

たくさんキス、しちゃいますね」

「きみの先走りでとろとろに濡れた

おっぱいで、

かっちかちの敏感おちんぽさんを、

ぎゅうううう……つと押さえて」

／＼軽くフェラする

「揉みしだくように、

くにゅくにゅ、くにゅくにゅ……。

おっぱいからはみ出した

おちんぽさんのさきつぽを、

ちゅっちゅっ、れろれろ……

ちゅっちゅっ、れろれろ……。

ふああっ」

「できるだけ我慢、ですからね。

んっしょ、んっしょ、んっしょ♪」

「おちんぼさん、がんばれ、がんばれ♪

んっしょ、んっしょ、んっしょ♪

おちんぼさん、がまん、がまん♪

んしょ、んしょ……がんばれ、

がんばれ……おちんぼさん♪」

「もちもちふわふわのおっぱいで、

むぎゅう、むぎゅう、

むぎゅむぎゅうう……!」

「はわあ……おちんぼさん、

すっごく固くなってる……っ。

負けないようにおっぱいで

締め付けちゃいますね……っ」

「根本から絞り上げるように、

下から上に向かって、

ぎゅううううう……!」

んっんっ、んっんっ、んっんっ♪

んっんっ、んっんっ、んっんっ♪」

「おっぱいで強く挟みながら、  
小刻みに動かして、  
さきつぽ責めしちゃいます」

「すぼめた唇で、  
辛そうにしているおちんぼさんの  
さきつぽを、

ちゅうううう……！  
ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、  
ちゅっ、ちゅうううう……！  
ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、  
ちゅっ、ちゅっ……。  
んっ……ちゅううううううっ！」

「おちんぼさんなでなで、  
ラストスパートです」

「それ。

んっんっ、んっんっ、んっんっ♪  
んっんっ、んっんっ、んっんっ♪  
もう本当にイキそう、なんですね？  
分かりました。

最後まで気持ちよくなる  
お手伝いしてあげますね」

／＼正面間近小声で話します

「おちんぼさんを、  
これ以上ないくらい、  
ぎゅううううつと、挟んで……っ」

「上下に、激しく動かして……！」

んっんっ、んっんっ、んっんっ♪  
それっ、それっ、それっ……！」

「我慢ですよ。もう少しだけ、我慢して。  
のぼりつめるまで、我慢して。

んっんっ、んっんっ、んっんっ♪」

「えい、えい、えい……っ！」

私の声に合わせて、おっぱいの中で  
気持ちよく出しちゃってくださいね」

「おちんぽさん、イッて……。」

おちんぽさん、イッて……。

おちんぽさん、イケっ。イケっ。  
イケっ……！」

／＼射精

「……ん♪

はわぁ……すごいです♪

おっぱいの中で、どぴゅどぴゅって……。  
爆発しちゃったみたいに、

真っ白に塗られてしまいました」

「ふふ……。」

我慢していっぱい溜め込んだおかげで、  
匂いも濃くて、とってもネバネバです」

「んく、

はふ……、すごく、えっちな味です……。  
これ、くせになっちゃいそうです」



／＼フェラの位置で話します

「あ……。」

えっと……。その……。

またまた私、最後の方とか、調子に乗ってしまったかもしれません……」

「男の子の部分が膨らんで辛かったのに、たくさん我慢させちゃって、

ごめんなさい」

「それでも私のお願いを聞いてくれて、嬉しかったです。

きみのこと、

またまた好きになっちゃいました。

ありがとうございますっ」

／＼立ち上がる、正面間近で小声で

「あの……肝心のきみは、

気持ちよくなってくれましたか？」

／＼気持ちよかったと答える男性

「そ、それは良かったです。

もし少し疲れちゃったら、

休んでくださいね？」

「でもまだまだ元気があるなら……

その……。

もう少しだけ、

お願いしたいことがあるんです」

「その……」

私、えっちな気持ち

が、どんどん高まって……。

き、きみがよかったら、

もっと、もっとたくさんいろんなこと、

してみたいな……」

「なんて……（右耳元に移動しながら）」

／＼右利きもとで囁きます

「恋人しかできないことの続き、

ここでももらえますか？」

／＼フェードアウト

トラック5.「ふわとろ私を召し上げれ♪」

／正面間近・抱き着く

「ん…………。」

うふふ…………」

「きみの方から、

私のことをぎゅってしてくれるなんて、  
安心させようとしてくれてるんですね」

「ふふ…………とても嬉しいです♪

ではお返しに、私からも、

ぎゅ〜ってしてあげますね？」

「ぎゅ……………」

「ふふっ。

キスも、してくれるんですか…………？

ん…………ちゅっ、ちゅうう……………」

ちゅっ、ちゅう…………ちゅっ、ちゅっ…………

ちゅっ…………ちゅううっ」

「ふふっ♪

抱き合ってキスするの、私、  
かなり好きかもしれないです」

「きみのおかげで、  
緊張もほぐれてきましたね」

「それに、その……」

きみのあそこも、もう準備万端という  
感じで大きくなっていますね

もっと気持ちいいことしてみたくて、

我慢できないって

感じになってますよ……？」

★机の上に乗る音

★服を脱ぐ音

／＼正面近くに移動して話します

「それじゃあ、ちよっとお行儀が

悪いですけど、

まずは私が机の上に乗って……。

私も、服を脱ぎますね」

「え、近くで、見せてほしい？

いえいえいえ。

その、ココは、

人に見せるものではないというか……、

あはは……」

「あゝ、でも、きみのはしっかり

見せてもらったのに、

私だけ断ったら不公平ですよね……」

「うん……。

い、いいですけど……あんまり見ないで  
くださいね！ 約束ですよ？」

「じゃあ膝を立てて、少しだけ、

足を開きますね……

見てもいいですけど、本当に、  
少しだけですよ？」

「では……ど、どうぞ……。

はう……。

ん……。

は……恥ずかしい……。

ひゃっ。そ、そんなに顔を

近づけなくてもいいのに……」

「い、息がかかっていますよ……。

え？ 濡れてる？

ぬ、濡れてなんていません……っ」

「き、きれい？

あ、ありがとうございます……。

う……」

「は……はい！

終わりです、恥ずかしいから、

終わりです！

感想は言わなくていいですからね」

★机の上に寝そべる音

「それで……、

どんな体勢でしてみたいとか、  
希望はありますか？」

「私ですか？　そうですね……。

お互い、はじめて同士ですから、  
最初は正常位を試してみましょうか」

「私の方が机の上に寝そべりますね。

きみもこっちに來てください……」

マイク移動、壁際

／＼こもりが寝そべり、男性が覆いかぶさ  
る

「わ、男の子の体って、大きいですね……

覆いかぶされると、迫力、ありますね」

「えへへ……今から、はじめて、

しちゃうんですね♪」

「ええと、そうだ……お願いがあるんです。

今日は、ゴムはしないで

ほしいんです……」

「一生に一度しかないはじめてなので、

きみのこと、直接、感じたいです……」

「あっ……。

きみのおちんぼさん、

今、元気に跳ねましたね？

ふふ……生で挿入できるからですか？

嬉しそう……」

「そろそろ、はじめます？

きみのおちんぼさんの先つぽと、

私のおまんこの入り口を

ぴったりくつつけて……」

「そ、そのまま前に進むように、

入れてみて、ください……」

「私は大丈夫ですから、遠慮せず……。

いっぱいおまんこのナカを使って、

なでなでしてあげますから……。

何も考えずに、

私で気持ちよくなってくださいね♪」

／＼挿入

「んっ……ああっ！ ふあああああっ………！

は、入ってきた……っ！

ああっ……すごい……

入ってきてる……っ♪」

「きみのおちんぼさん……

私のおまんこに、深く、

入ってきちゃいましたあ……っ。

あふうつ………！」

「だ……大丈夫ですよ。

はじめてだけど、

あまり痛くないみたいです。

きっと、きみと私の相性が

ばっちりだからですね……っ♪

えへへ……」

「んっ、ああっ……いい、いいですよ……。

おちんぼさん、

もっと動かしてください……っ。

私のおまんこで、よしよしっ

受け入れてあげますからね……っ♪」

〃ゆっくり挿入されながら

「ず、すごい……っ。

大きい……あっ、あああ……っ、

あふ……っ！」

「えへへ……。

きみがゆっくり動いてくれてるから、

おちんぼさんの形も

しっかり分かって……」

「あああ、はあ、はあっ……

とっても嬉しいです……っ♪」

「きみのおちんぼさんが

喜んでくれていると思うと……、

私のおまんこ、きゅんきゅんして、

とっても幸せな気持ちに

なっちゃいました♪」



／＼ゆっくり挿入されながら

「こんなのされたら、きみのこと、もつとも  
つと好きになっちゃいますよお……」

「おちんぼさんがおまんこの中で動いたび、  
私の子宮、きゅんきゅんして、  
びくびくって気持ちよく  
なっちゃってます……っ♪」

「んっ、あっ、ふああっ！  
あっ、はあっ、んっ、あああっ！  
ダメ……こんなの気持ちよすぎて、  
ほんとにダメ、ですう……」

「私の方が先輩なのに、  
きみのおちんぽさんを  
気持ちよくしてあげなくちゃ  
いけない立場なのに……、  
ああっ！ ふああっ！  
はあああ……っ！」

「私のおまんこで、おちんぼさん  
なでなでして、  
たくさん気持ちよく  
なっしてほしいのに……、  
ああっ！ んあっ！  
あっ、はあああ……っ！」

「きみの肩に手を回して、  
ぎゅうぐって抱きついて……、  
もつと、きみに気持ちよく  
なってもらうんですからね……っ」

／＼挿出入、停止

／＼抱き着いて左耳元で囁きます

「……はむっ！んちゅ……」

ちゅっ、ちゅっ、ん、れろれろれろ……」

「えへへ、どうですか……？」

お耳舐め、気持ちいいですか？」

／＼ゆっくり挿出入されながら  
／＼耳舐めしながら

「んっ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅう……♪

おちんぼさんっ、ちゅう、ちゅっ、

ちゅっ……

お射精、がんばりましょうね……♪」

「ちゅっ、ちゅぽっ、

んちゅ……ちゅっ、はぁ。

私のおまんこいじめてくれる、

おちんぼさん、大好きです……っ」

「んちゅ……ちゅっ、ちゅう、ちゅう……

好き、好き、好き……っ

んちゅ……ちゅっ、れろれろ……」

「おちんぼさん、私のおまんこに、

気持ちよく中出ししてくださいね……♪

はむ……はぁむ、ちゅるっ、

ちゅるるるっ、んちゅ……」

「ちゅっ、ちゅうう……っ。

きみのおちんぼさん、  
すごく熱くなってきましたよ……っ」

「んちゅっ、ちゅるる……

ちゅっ、ちゅうう……っ、

おちんぼさん、イキそうですか……？  
もう、出ちやいそうですか？」

「それじゃあ……、

私が合図をしますから、  
合わせてお射精してくださいね♪」

「きみが気持ちよくお射精できるように、  
耳ぺろぺろしてて

あげますからね……♪」

「ちゅっ、ちゅるる……ちゅっ、ちゅぷぷっ、  
とろとろおまんこの中に……

白いのいっぱい、  
出してくださいね……っ♪」

「んちゅっ、ちゅっ、ちゅうう……っ！  
ん……

限界ですか？

もうイっちゃいますか？

ちゅっ、ちゅっ、ちゅうっ……」

「ちゅっ、ちゅうう……っ♪  
ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……♪  
ふふ、よくがんばりました。  
それでは、イッてくださいね♪  
はーい、どうぞ♪」

## ／＼射精

「……んっ！ん……っ！（射精）  
んん……っ♪」

「はぁあっ……おまんこに、  
どくんどくんって、きみのお精子、  
送られて来ていますう……」

「あ……あっ、はぁ、あ……っ  
私のおまんこも……  
すっごく気持ちよく  
されてしまっています……」

「きみのかっこいいおちんぼさんに  
ぴゅっぴゅされて、私……  
イッちゃいました……♪」

「はぁ……あっ、はぁあ……っ♪  
はぁあ……  
とっても、気持ち、  
よかったですう……♪」

(耳から離れる)

／＼正面間近で話します

「私のおまんこ、どうでしたか？  
ちゃんときみを気持ちよく、  
できていましたか……？」

／＼頷く男性

「そ、そうなんです。よかったあ……♪」

「いっぱい動いて、

疲れてしまいましたよね？

このまま抱きしめて、

頭をよしよしって、なでてあげますね」

「ゆっくり体を休めて、

落ち着かせてください。

よしよし……よしよし……。

ふふ♪ なでなで、なでなで……」

「あ、あれ……？」

おちんぼさん……

全然落ち着かないですね……？

むしろちよつと大きくなったような……」

「え……？」

まだ足りない、ですか？

ご、ごめんなさい。

きみが満足できなかったのに  
気づかなかったみたいです……」

「え、違うんですか？」

私のことをもつと

気持ちよくさせたくて、

こうなってる、ですか？」

「はうう……。

ほ、本当ですか？ そんなの、嬉しくて  
泣きそうになっちゃいますよ……」

「ふふ……私だって、きみのこと、

もつともつと好きですからね……！！

それじゃ、もう一度、

おまんこに入れてください……」

「ん……はふう……。

入り口を広げて……

おちんぼさん、入ってきました……。

温かいです……嬉しい……」

「えへへ……私は大丈夫なので、

きみが満足できるまで、

好きに使ってくださいね♪」

／＼激しく突かれながら

「んっ……、あっ、

はああああああ……っ！

さ、さつきより、

いきなり激しいです……っ

あっ、はああああ……っ！」

／＼激しく突かれながら

「おちんぼさん、硬くて、  
おまんこの奥まで、届いて……っ。  
すごいっ、おまんこ、  
気持ちよすぎます……っ！」

「んっ、はあっ、ああっ、  
ああああ……っ！  
はあ、はあ、ああっ、んあっ、  
はああああ……っ！」

「も、もっと、顔見せてほしいです。  
体をびったりくっつけてください……  
きみのこと好きな気持ち、  
もっと伝えたいです……」

／＼右耳元で囁きます  
「好きっ……きみのこと、好きっ……  
抱きしめられるのも、  
キスするのも、好き……  
きみがしてくれること、全部、  
好きなんです……っ」

「んっ、あ……はああ……っ！  
あっ、はっ、はああ……っ！  
おまんこ、  
とっても気持ちいいです……っ  
きみのこと大好きだから……  
おまんこ、すごく喜んでいます……っ」

／＼激しく突かれながら

「んっ……ああっ、はあ、ああっ、  
んあっ、はああああ……っ！」

「えへへ……

もっともっと、

きみに気持ちよくなっただけですっ  
きみが気持ちよさそうだと、  
私も幸せな気持ちになるんです……っ」

「えへへ……好きです……♪

ん、ちゅ……ちゅっ、ちゅっ……

好き……ちゅっ、れろれろ……

好き、好き♪」

「だ、だめ……

きみのおちんぽさん気持ちよすぎて、  
私、我慢できなくなりそうです……っ  
おまんこ、もうイキそう……  
なんですっ……っ！」

「あ……でも、きみのおちんぽさんも、  
今、びくびくっしてましたね……♪

お射精、できそうですか……？

二回目のびゅっびゅ、

私のおまんこにしてくださいか……」

「お、お願いしますっ……

いっぱい中出ししてください……♪」

「もっといっぱいお耳にキスしますから、  
私の合図でまた

気持ちよく出してくださいね……♪」



／＼激しく突かれながら

／＼右耳舐め

「んっ……ちゅっ、ちゅうう……  
ちゅっ、ちゅっ……  
んちゅっ、ちゅうっ、ちゅっ、ちゅっ…  
…ちゅっ♪」

／＼正面に戻って

「ん……。はあ、あっ……、  
あっ、あっ、気持ちいいです……っ。  
んっ、ああっ、はああ……っ！」

「お、お射精、しそうですか？

おちんぽさん、  
びゅっびゅしちやいそうですか？  
えへへ、いいですよ……っ、  
いつでも出してくださいっ♪」

「んっ、ああっ、んああ……っ、  
い……行きますよ……？  
はーいっ……♪」

／＼射精

「……あっ！（射精）あ……っ！  
あ……っ、は、あ……っ。  
で、出てる……  
中にいっぱい、出てるう……」

「すごい……

2回目とは思えないくらい、たつくさん。  
おまんこから、  
白いの溢れちゃっています……」

／＼抱き着いて左耳元で囁く

「えへへ……♪

おまんこの中、とっても熱いです……」

「はあ……はあ……

うふふ。おちんぽさん、

よくがんばりましたね。

元気にぴゅっぴゅできて、

えらいえらい、です……♪」

／＼正面に戻って小声で

「ん……ちゅっ、ちゅう……ちゅ……ちゅっ、

ちゅっ……ちゅっ、ぱ……♪

は、あ……♪

私も、とっても

気持ちよかったです……♪」

「うふふ。

私のこと、

たくさん気持ちよくしてくれて……

ありがとうございます……♪」

「してる間ずっと、

私のことを好きだっという気持ち

伝わってきて……

とっても嬉しかったです♪」

「そろそろ、遅い時間になってきましたね。

きみもいっぱい動いて、疲れましたよね。

このまま最終下校の時間まで、

ゆったりしていきますか？」

／＼抱き着いて右耳元で囁く

「このまま眠ってしまっても大丈夫ですよ。

時間になったら、

私が起こしてあげますから。

安心して眠ってください♪」

「あ……そうだ。

起きたら、二人で一緒に帰りませんか？

手をつないで、一緒に下校するの、

夢だったんです。

ふふっ。約束、ですからね」

／＼フェードアウト